

子育てと夫婦の連携 (1)

子育てをめぐるさまざまな人間関係

黒田 淑子

はじめに

日常生活において、夫婦が父親・母親として、子育てにかかわる場面にはどのようなものがあるだろうか。子育てでも、親子の関係も十把ひとからげにはくくれない、まさにさまざまなかたちがあるが、日常の参加観察資料や親との話し合いの資料(注1)の中から、いくつかの場面を取り上げてみよう。

〈場面1〉夕ごはん前のひととき、ひさしぶりに早く帰ってきた父親と子どもたちはおふろに入ったり、ゲームをしたり大はしゃぎ、その声をききながら母親はハミ

ングしながら得意料理に腕をふるっている。

〈場面2〉きょうは仕事をしている母親の早出の日、「いってらっしゃい」と見送ってから父親と子どもは歩いて保育園へ、「あっ、パパみて……」とまわりのいろいろなものに興味をもって驚きの声をあげる子どもに父親も思わずびっくり、ふだん見慣れている世界が違って見えるな〜などと、朝の小さな散歩を楽しんでいる。

〈場面3〉病院で子どもの育ちに問題があるといわれ、母親が一日中思い悩んでいたところへ、父親の遅い帰宅、待ちかねていた母親・妻が、とにかく耳を傾けてく

れる父親・夫にきょうのできごとを語りかけ、少し気持ちも落ち着いてきて、二人でその問題をめぐる相談をしている。

〈場面4〉おやすみの日の朝、みんなそろって朝食を食べてから、父親と子どもは近所の川べりの公園へ自転車に乗って出かけ、母親はゆったりとお茶を飲みながら、新聞に目を通してしている。

〈場面5〉きょうはわが家の年中行事の凧をあげに行く日、お天気もよし、風の吹きぐあいもよし、それぞれに工夫をこらした凧を持って、子どもたちも父親も母親もうきうきとした気分であかけようとしている。

ここに挙げたのは、いずれも、日常のちょっとしたふれあいの場面であるが、このように、それぞれの親子、夫婦が生活を共にし、わが家にふさわしい連携のかたちをつくっていくことは、かけがえのない子育て期をゆたかに生きるきっかけとなるのではないだろうか。

本稿では、おもに人間関係のなりゆきに着目して、具体的に“連携”の可能性を探りながら、その意味につい

て考究していく。

三者がつくるしなやかな人間関係

“子どもが生まれる”、これは人生の転機となる大きなできごとである。夫婦の人間関係に父子の人間関係が加わって重層的な人間関係構造となり、生活のリズムも新しく変わることになる。夫婦が共に協力しあって子育てにかかわっていくことになれば、新しい生命の成長を見まもり、はぐくんできていくという感動的な体験をわかちあうことになり、いろいろな問題にも、相談しあい支えあいながら対処していくことができよう。子育てをめぐる役割分担のしかたは、それぞれの家庭の事情、あるいはまた母親、父親の事情（特技、性格、忙しさなど）によってまちまちであるが、とにかく“夫婦・父母で協力しあって”という姿勢でいけば、さまざまな連携のかたちが出てくるものである。例えば、食事・洗濯・掃除など日常生活のおもな仕事は母親がこなしているが、ある特定のこと（おふろとつめきり、お休みの日のサイク

リングなど）は父親の役になっている／あるいは月初めに相談して、食事は父親・母親の当番制にしている／毎月、父親の料理の日をきめている／あるいはまたあまりこまかくきめないでそのときどきで必要な仕事を分担している／その他。

ふだん家事をする機会の少ない父親にとっては、子育てでも家事も楽しみな体験となる場合があり、例えば、「いちごとスライスチーズ」「うどんのマヨネーズあえ」など意表をつくおやつを創作したりして、いつもの生活に新風をふきこむことにもなる。場面2のように、子どもと共に生活することは、思いがけない感動・発見の連続で、親自身の人生を活性化することにもなる。

母親だけが子育てに忙しく、親子で孤立してしまうと、いらいらしやすい状況になってしまうことがあるが、父親がどこかに位置をしめ、なんらかの役割を担うことで、ゆとりが生まれ、母子の関係もしなやかな活気にみちたものに変化していくことだろう。場面1の母親のハミングはゆとりや楽しさをあらわしているように思

われる。

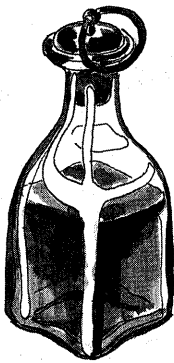
子どもがいて、母親がいて、父親がいる、この「三者関係」は、「二者に共通の通路」が三つ組み合わせをもって開かれており、さらに「二者の関係に対して他の一者かもつ関係の通路」が開かれている関係（注2）であるから、人間関係の動きがダイナミックになり、親子の問題状況に対処するかかわり方の可能性も、さまざまに見出していくことができよう。例えば、父子の関係が険悪な状態になっているとき、母親が仲立ちをしてその関係が新しく変わるきっかけをつくる場合、あるいはまた、母親に叱られて行き場がなくなってしまう子どもが父親のかたわらに行き、怒り、悲しさ、後悔……のいりまじったごちゃごちゃの思いを聞いてもらい、はげまされて、立ち直るまでのひとときを過ごす場合など。場面3のように、子育てをめぐる「たいへんな」問題に直面することになっても、母親あるいは父親だけが思い悩むのではなく、いっしょに話し合い、相談することができれば、また親子を支えるネットワークへの通路を開いてい

くことができれば、子どもとともに、生きることの苦しみ、喜びをわかちあい、充実した生活を送っていくことができよう。

母子・父子・夫婦のさまざまな人間関係体験

ここでは、視点を変えて、子どもの立場から夫婦・父母の連携の意味を探ってみよう。父母子の三者関係を基盤にして生活していくことは、さまざまに異なるゆたかな人間関係体験を重ねていくことである。後で述べる楽しい集いのように父母子いっしょの人間関係を体験するとともに、お母さんと過ごす時間、またお父さんと過ごす時間を持ち、それぞれに特色のある人間関係体験をすることになる。例えば、星を見るのが大好きなお父さんとは夜空の星を観察して語りあうという体験を、歌や踊りやドラマの大好きなお母さんとは人形劇を見にいったり、夏祭りの盆踊りの輪に加わったりなどの体験をするというように。その他、ふとんにねころがってのお母さんとの絵本遊び、神社の境内でのお父さんとのボール遊

びのように、人間関係体験のひろがりに応じて生活空間もいろいろひろがっていくことになる。もしきょうだいがいるなら、人間関係はもっと複雑になり、まさにさまざまな人間関係を体験することになる。きょうだいげんかなどの緊迫した関係が生じて、父親・母親が連携しあうことによって、子どもたちとともにゆとりのあるかわり方を探っていくことができるのではないだろうか。



もう一つ、三者関係に特有の人間関係体験は、子どもが父親と母親の相互の関係を、あるいは父親、母親の生きかたを“観る”という体験である。真剣に語り合っている父母、父親の気持ちによりそい支えようとしている母親（または母親を支えている父親）、協力しあっている父母、けんかしている父母、楽しそうに笑いあっている父母など、いろいろな父母の関係を観ることによって、子どもは実際に人と人との関係のありかたを見聞きし、人とのかかわり方の可能性を学んでいくことになる。子どもは夫婦・父母の関係をよく観ているのである。子育て期に、夫婦の関係が稀薄になってしまうのではなく、子育て期だからこそ、夫婦の関係がどうなっているかをみつめ、新たな気持ちで、お互いの関係をはぐくんできていくことが望まれる。

子どもはまた、人生の先輩としての親自身の生きかたをも観ている。父親の生きかたと、母親の生きかたの両方を観ることによって、子どもは一通りではない多様な生きかたがあることに気付き、いろいろな可能性を探り

ながら、自主的に自己の生きかたを選択決定していくことになろう。父母とともに生活しながら、子どもは、進路・仕事の選択のしかた、ライフスタイルの決めかた、自然や生きものへの接しかた、道具とのつきあいかた、人間関係のありかた、生活文化の伝承・創造のしかたなど、いろいろなことを学んでいくのである。

ひとりの時空間を持つこと

これまで、夫婦の連携が“ゆとり”のあるしなやかな人間関係を構築していくきっかけとなることについて述べてきたが、このゆとりは、お互いの人格を尊重しあい、共に生活していくためには必須の、ひとりで自由に過ごす時空間を生み出す。母子、父子あるいは父母子で過ごすみちたりた時間の合間に、子どもも、母親も、父親も、ひとりの時空間を持つことができるのである。何をしてもしよい、何もしなくてもよい自由なひととき、だれにもじゃまされず、だれにも管理されない時空間、これはだれかとの関係に依存することなく、ひとりの人間

として自発的に生きる時空間として貴重なものである。

子どもだったら、例えば、お気にいりの草むらにしゃがみこんで虫と遊んだり、大好きなブロック遊びを延々と続けたり、秘密のプレゼントづくりにいそしんだりして、自由遊びを満喫することだろう。そして母親や父親だったら、例えば場面4のようにお茶を飲みながらほっとしたり、新聞や小説を読んだり、テレビを観たり、趣味を楽しんだり、街に出かけたりなど、交互に、親の役割をこえたところで自由に行動する開放感を味わうことになる。このような体験をすると、先での親子・夫婦の出会いが新鮮なものになり、お互いに知らないことや面白い発見を報告しあったりなど、人間関係にもめり合いができることになる。(注3)

子育て期の母親は、往々にして、「○○ちゃんのお母さん」でくくられてしまうことがあるが、そうなる、いつも母親でいることを強いられることになり、感動、発見、喜びでいっぱいのお母体験になる筈のところ、ときには、しなければならぬことに追われて疲れはて

てしまうことにもなりかねない。「○○ちゃんのお母さん」であると同時に、ひとりの女性として、ひとりの人間としても生きられる状況をつくっていくことが、子育て期を楽しくゆたかなものにしていく一助となるのではないかと考える。夫婦の連携はそのような状況づくりを自然なかたちで進めていくことになるのである。またこれは、往々にして、子育てにかかわる機会を逸してしまいがちな男性が、「○○ちゃんのお父さん」としても生きられるような状況づくりにつながっていくことだろう。

家族の集いー人生の楽しみをわかちあうとき

場面5の凧あげのように、家族がなにか企画をたてるとともに集う状況は、生きる喜びがわきおこってくるようになわくわくした気分につつまれ、まさに人生の楽しみをわかちあうときになっていくことが多い。企画の相談をしているときの活発な話し合い、いろいろな役割を分担しあい協力しあっている準備、当日の楽しい集い、できあ

がった写真を見たりして思い出を語りあう……など、家族が直接出会い、はたらきかけあう活動を通じて、子ども、母親、父親、その他、家族ひとりひとりの存在が浮き彫りになり、家族間の心の絆が深まっていくのである。夫婦の連携が基盤にありながら、家族が連携しあう活動だと言えよう。

家族の集いのかたちにはさまざまなものがある。例えば、誕生日のお祝い、入園のお祝い、結婚記念日など、主役になる家族を祝う集い、ここでは、お祝いの食卓、心のこもったプレゼントなど、物が媒介になって人となごやかに集う状況がつけられていくことになる。

その他には、お正月、七夕、お盆、十五夜など、代々受け継がれてきた行事を介しての集い、ここでは、お正月のお雑煮の味など、行事にまつわる特別の活動を通して、親から子どもへと、もろもろの生活文化が伝えられていくことになる。

また、家族旅行、観劇、凧あげ、栗ひろい、川原のバーベキューなど、外に出かけて家族で楽しむ多彩なイ

イベントもある。ここでは、日常とは異なる空間で、次々に楽しい活動をいっしょに創造していく楽しさを体験することができよう。

地域のお祭りやリサイクルのフリーマーケット、自主共同保育の遠足（家族も参加しての遠足）などは、他の家族とふれあう集いである。ここでは、三々五々と自由に交流しあうなかで、さまざまな人びととの人間関係体験をひろげていくことができよう。

以上、いろいろなかたちの家族の集いを挙げてきたが、これらの集いに共通していることは、いずれも、日常の生活と重なりながら日常をこえる新しい状況で、父母子が直接出会って交流する機会となっていることである。したがって、夫婦の役割の担いかたも、親子の間関係も、新しくつくられていく状況で、いつものかたちにとらわれずに、柔軟に変化していくことになる。

例えば、誕生日の集いは、子どもが主役になるときはばかりではなく、母親または父親が主役になるときもあるから、祝う人、祝われる人、プレゼントをする人・もら

う人の役割を交代していくことになり、勾配のある人間関係が逆転したりなど、いろいろな立場で、心をかよわせる体験をしていくことになる。

行事を介しての集いでは、例えば新年を迎えて、厳粛な雰囲気かただよう舞台空間で、挨拶のしかたを含めて伝統的な役割を型どおりにとってみることで、共に生活の節目にたつての、父母子の出会いを鮮明に体験することになる。父母の具体的なふるまいかたを観て自分自身もしてみることで、子どもは文化の形と心を学んでいくのである。

家族のさまざまなイベントは、企画をたてるどころから日常に新風をまきおこす。父母子共通の楽しみを自分たちの手でつくっていくとする過程そのものが、家族のふれあいをゆたかにし、家族それぞれの生きる活力を鼓舞することになる。例えば、だれもが旅人になって未知の世界の発見、感動をわかちあう家族の旅では、行く先々の状況に応じて、父母子が相互に新しい役割をとりあつていく醍醐味をじっくり味わうことができよう。

地域の集いに家族で参加する機会を持つことは、地域・社会へのひらかれた関係づくりのきっかけとなり、家族どうしの交流を深めていくことにもなる。そこから子育てを支える地域の人間関係のネットワークづくりに発展していく場合もある。そのような関係づくりにも、夫婦で参加することができれば、お母さんの力、お父さんの力があいまって、子どもと共に生きる快適な環境づくりに主体的にかかわっていく道がさまざまにひらかれていくことになる。

注1 お茶大児童学科・人間生活学科発達臨床講座 人間関係研究室主宰、乳幼児集団研究会及び児童集団研究会の資料(活動記録、ニュース、文集など)

注2 松村康平・板垣葉子『適応と変革―対人関係の心理と倫理』誠信書房、一九六〇

注3 黒田淑子『生きることと人間関係―心理劇の活用』学献社 一九八八

(お茶の水女子大学)